

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1. 予期せぬ出来事

1-1

辰巳太郎を乗せたタクシーは外堀通りを走っていた。国会議事堂は数日前に総辞職した麻生内閣の一片の残滓すら見せずに、花崗岩でできた壁面を、投光機によるライトアップで青白く浮揚させていた。

2009年9月20日(日曜)。辰巳は、新神戸駅から三時過ぎの山陽新幹線上り「のぞみ」に乗り込んだ。

季節にしては車内の冷房が快かった。

五十六歳になる辰巳は、「灘の生一本」で知られる大阪湾岸の御影郷に、江戸時代から続く醸造家の十四代目を継承していた。

同志社大学ラグビー部で四回生の時、憧れの背番号二番を貰い、フッカーとして活躍していた頃は、身長176センチにも関わらず、体重は101キロもあったが、今では70キロを維持するように心がけている。

現在、御影郷だけでも、十社余りの清酒メーカーが鎬を削っている。

資本金五億円、従業員数四百名の辰巳が経営する『H酒造』は、清酒の他に、焼酎、味噌、輸入ワインなどの販売を手掛けている。

辰巳は月に一度の割で、銀座五丁目にある東京支社に出向いていた。

グリーン車の背もたれを程良く調節した辰巳は、頭の中をフルリセットするために、一週間前に例会で対戦したチェスの棋譜を読み始めた。仲間のロータリアンに誘われて、神戸チェスクラブへ入会して5年になるが、棋力を示す指標のレーティングは1800で、将棋に置き換えると二段位である。

ホテルオークラ本館の正面玄関に停車したタクシーの後部ドアが開くと、「辰巳様、ようこそいらっしゃいました」

降り立った辰巳に、ドアマンが、さりげなく呼びかけた。

帝国ホテル、ホテルニューオータニと旧御三家と並び称されたホテルオークラ東京は、近年、進出著しい新規外資系ホテルに、その牙城を脅かされているが、ミシュラン東京ガイドで五つ星の評価を受けるなどして、一流の格付けをどうにか保持していた。

陶芸家で人間国宝富本憲吉最晩年の作といわれる『思弁花文織成壁』を右手に、真正面の窓際には大障子があり、吹き抜けの天井からは六角形の切小玉を連ねたランタンの柔らかい明かりが映えていた。

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1-2

ロビーに足を踏み入れた辰巳は、椅子から立ち上がって足早に近づいてくる女に、一瞬怯んだけれど、「今晚は、お待ちしております」と挨拶されて、「?…、オッ、貴女か！
てっきり着物だと思っていたから」と辰巳は目を見張りながら言って、微苦笑した。

「プライベートでお会いするのは、初めてですもの」

スタンダードなブラックドレスに、瑠璃色のベルベット地のボレロ風ジャケットを羽織った女は、打ち解けた物腰で言った。

男は女の胸まで届く髪型も含めて、見事な変身ぶりを、数年前、純米大吟醸・中汲み生原酒の試飲で、想定外のきめ細かく奥深い味わいに、思わず杜氏にハグしてしまった瞬間を重ねて、不思議な高揚感に包まれていた。

「荷物を部屋においてくるので、すまないが、この階にあるバーで、食前酒でもやっていたくれないか」

辰巳は妙な感慨を覚えながらも、そう言って、手でバーの方を指してから、女の同意を得るとフロントに向かった。

ヴェルサーチを嫌味なく着こなした女、白井真紀は銀座四丁目で『こはる』というクラブのママをしている。

二十年前、慶応義塾大学文学部英米文学専攻に在籍中、赤坂のクラブでアルバイトをしたのが転機だった。

美形ではないが、切れ長の目に知的な陰影を漂わせる容貌と生来の外向性に加え、卓越した会話力が小難しい顧客の評判を呼んだ。

辰巳は東京支社に出張すると、数日は滞在して、営業を兼ねた人脈づくりや、活きた情報収集などをして過ごした。

取引先デパートの商品統轄部長に連れられてきたのが縁で、それ以来『こはる』を最真にしてきた。

ホテルオークラは五階がメインロビーになっていて、メインバーのオーキッドバーが同じフロアにある。

丁重に笑顔で迎え入れたバーマネージャーに、辰巳は軽く応えながら、ボックス席からカウンターへと視線を泳がせた。

「辰巳様、お待ちしておりますか？」

直ぐさまマネージャーが心配りをする。

「ご婦人がひとりで来ているはずなんだが」

「あちらにいらっしゃる方では……」

「……ありがとう」

背伸びをした格好のままの辰巳は、カウンターにふたり並んで座っている外人で死角になっていた真紀を認めると、マネージャーに礼を言った。

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1-3

「待たせたね。オーダーは？」

「これからいたします」

「私に任せてくれるかな」

辰巳は、さも嬉しそうに真紀に一言断わってから、バーテンダーに手を挙げた。

「お決まりですか」

「ヴァルデスピノのイノセントを、こちらと私に」

「かしこまりました」

冷やされたシェリーの注がれたグラスを軽く合わせて、互いに一口飲んだ。

「……」と真紀は無言で嘆じる。

「この手のドライシェリーは、多分、初めてなんじゃないかな」

辰巳は独り決めして、したり顔で言った。

「お店にも置くようにします」

真紀は即答すると、バーテンダーにボトルを持ってこさせて、携帯電話で写真を撮ってから、興味深げにようすを窺う隣席の二人連れの西洋人に「エクスキューズ」と謝った。

辰巳は真紀の一連のシャープな動作を好ましく思いながら、ボレロ風ジャケットを脱いだらわになった二の腕と胸の膨らみを横眼づかいに、和服姿しか見たことのなかった女の艶めかしさに、年甲斐もなくどこか気持ちが高ぶっていた。

「『こはる』にボトルキープしてもらっている我が社の米焼酎は、この醸造所の甘口シェリー酒の空樽で熟成させていてね。シェリー酒の産地でも、今は製造法が近代化されて、空樽不足は当然で、シングル・モルト・ウイスキーでさえ、空樽熟成が希少価値の時代になってしまった」

男は女の微香に揺らぎながら言った。

「そのお話は、前にも伺ったことがあります。空樽にもこだわりがあるとは存じませんでした」と女は嬉しいことを言ってくれる。

「スペインのアンダルシア地方の田舎町に、なんども出向いてね。先方は十九世紀半ばの創業、こちらは十八世紀半ばの創業。伝統をバックグラウンドにした熱意が伝わったと思うのだが、交渉成立までには苦労があった」

文字通りだったのだが、辰巳は大仰な言い回しをした。

「シンプルでいて、どこか懐かしいような瓶の形に、手漉き和紙にあのイケメン書家作の『米焼酎一風』のラベルと天然コルクの蓋。それに、今、話されたシェリー樽。まさしく辰巳ワールド！」

真紀は満面に婀娜っぽさを浮かべて、ピンポイントの取り持ちをしてくれた。

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1-4

「スマン、スマン、自分のことばかりで、とんだ野暮天をやってしまった」

辰巳は、さすがに愉悅の気持ちを希釈することを忘れなかったし、すかさず「とてもいいお話です」と真紀が言ってくれるので「ここの広東料理が絶品でね」と少しも銜うこともなく切り出せた。

「お任せします」

「せっかくの機会だし、帝国ホテル一辺倒の貴女の心変わりを期待して、チェックメイトといきたいところだが」

「まあ、おっしゃいますこと～。わかっていても中々……、困った性分です」

「その情っ張りなところも、魅力の一つなのだから。今夜は、差し詰め貴女がクィーンで私がビショップってところだろうね」

「僧正帽子がお似合いかもしれません」

「昔、フランス辺りでは司教などがワインやら薬用酒を造っていたからね。満更ミスマッチではないかもしれない」

辰巳と真紀は軽口をたたき合いながら、本館六階にある広東料理の店『桃花林』へと向かった。

1962年のホテル開業と同時にオープンした『桃花林』は、中国料理店としては業界の草分けで、2004年に“極上のチャイニーズ空間、をコンセプトに、フランス人デザイナー、エティエヌ・デクル氏に室内意匠を依頼、初秋にリニューアルを果たした。

「マネージャー、こちらはホテルと言えば、帝国しか眼中になくてね。なんとか寝返って頂けないものかと、真っ先にこちらへお連れしたのだから、よろしく頼むよ」

席に案内された辰巳は、棘のある口ぶりで伝えた。

「さようですか。帝国さんの『北京』は宮廷料理。私どもは広東料理でございますので、何とぞお手柔らかにお願い致します」とマネージャーが如才なく応対する。

「アイ・コンタクトで組まれては、勝ち目はありませんわ」

真紀は男ふたりの面持ちを可笑しがって、揶揄するように言った。

「かわいいヒトだ」

辰巳は唐突に言って、目じりを下げた。

「あら、耳慣れないお言葉。でも嬉しいわ。学生の時以来ですもの」

心底惚れた男と同じ言い回しをされた真紀は、動揺を押し隠すことに必死だった。

「ほう、その頃、会って見たかったね」と辰巳は言って目じりを下げた。

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1-5

「お飲み物は、いかがなさいますか？」

会話の腰を折らない頃合いをみて、マネージャーが注文を伺った。

「そうだね……。貴女は？」

「司教(ビショップ)にお任せします」

「ハハー、王妃様！それではナイト(チェス駒の騎士)に申しつけましょう。ワイン・クルーズ・シーズンの限定ワインリストを！」

大仰ぶって命じた辰巳は、怪訝な面持のマネージャーに「君、チェス用語だよ。ほら、こんな感じで駒を動かす……」と手ぶりをみせてから、「この方はこう見えてもチェスのなかなかの使い手でね。そこがまた魅力なんだよ」とまことしやかにのたまう。

「辰巳さん、ゲームセット。降参です」

真紀は、この辺が潮時と見て、あっさりと投了した。

「え、ひどいなあ。人がチェック(王手)をかけてもいないのに～」

真紀の心外な出かたに面喰った辰巳は、不服を唱えた。

「今日からオークラファンです」

「エッ？」

「バンケットには何度か来ていたのですが、いつもとんぼ返りでした。ともかく、辰巳さんの妙手に完敗です」

「ほう、キングも登場しないうちから？ヘンチクリンだな～。貴女らしくない」

「ですから、妙手と申し上げました」

真紀は、わざと拗ねて見せた。

真紀としては、早めに本題に入りたかったし、仕事柄、辰巳のような人の扱いは弃えていたので、その間合いは絶妙だった。

「こちらがシャサーニュ・モンラッシェ・ドメーヌ・ラモネ 2008 年です」

ソムリエがワインクーラーに冷やされている白ワインを、ラベルが見えるようにして確認をとってから抜栓した。

「テイ스팅はいいから」

辰巳が促したので、ソムリエは先に真紀のグラスにワインを注いだ。

「赤も良いけど、どうですか？」

辰巳が、軽くスナップを効かせてグラスを回し、鼻に近づけ、ひと口味わってから聞くので、真紀も、ひと口飲むと、フッと息抜きをして、満足げに頷いた。

「香りが開くまで時間がかかります。奥行きを秘めているワインですので、ほどほどに冷やしてあります」

ソムリエが、ひと言添えた。

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1-6

「貴女のようなワインを選んだようだ」

辰巳は、わざとらしく放言すると、口に含んだワインを舌で転がした。

「あら、そうでしょうか」

真紀は逆らわずに受け流した。

ゲスト二人の眼が笑っているのを窺ったソムリエは軽く頭を下げて、その場を離れた。

真紀は横恋慕した情人が残して逝った会社の後々について、辰巳に相談してみようとしていた作意を後悔し始めていた。ところがアワビのオイスター煮込みと白ワインの絶妙なマリアージュに加え、会話の端々に俗気まじりの色好みが見え隠れする男のセンスを目の当たりにして、やはり自分の感に狂いはなかったと安堵していた。

気持の振幅を、異なることが一遍に収束させたことに戸惑いながらも、以前にも似たような事象があって、真紀はそれが何であったかを思い出せないままに、ご託宣が下りたような吉兆とみなす先触れだと思うことにした。

思案気な面持ちの真紀に、「心ここに在らず」と辰巳は言って、丁度現れたソムリエを制すると、自ら真紀のグラスにワインを注ぎいれながら、呪文を唱えるように擲諭した。

「すみません。トリップしてしまいました」

真紀が神妙な顔で言い訳をする。

「ふーん。ワインに一服盛られたのかな？」

辰巳はことさら心配振ってから、おもむろにソムリエを呼んだ。

「辰巳さん。ご相談があります」

真紀は改まった口調で卒然と言った。